

「イエスのまなざし」(教皇フランシスコ 使徒的勧告 「福音の喜び」)

福音宣教の第一の動機、それは、わたしたちが受けているイエスからの愛であり、イエスをますます愛するようにとわたしたちを促す、救いの体験です。しかし、愛する人について語ることに、その人を他人に紹介することに、その人を知ってもらうことに、必要性を感じない愛とは、一体何なのでしょう。もし、イエスを伝えたいという強い思いを抱いていないなら、イエスに向かって、再びあなたに引き寄せてくださいと、もっと祈る必要があります。わたしたちは、日々、切に願わなければなりません。冷え切った心を開いてくださるよう、熱意に乏しくうわべだけの生活を送るわたしたちを目覚めさせてくださるよう、イエスの恵みを切に願わなければなりません。イエスの前で心を開き、イエスから見つめられるがままになれば、ナタナエルがイエスに会って「わたしは、あなたが…いちじくの木の下にいるのを見た」(ヨハネ1・48)と言われた日に知ったあの愛のまなざしを認められるようになります。十字架の前にいること、聖体の前にひざまずくこと、ひたすらイエスのまなざしのみを受けていること。それは何と甘美なことでしょう。(264)

イエスの生涯、貧しい人々に対する接し方、振る舞い、一貫性、日常的で気負いのないやさしさ、そしてその最後の全面的な奉獻、それらすべては尊く、わたしたち一人ひとりの生活に訴えています。(265)

イエスご自身が、わたしたちが民のただ中に入っていくというこの福音的選択の模範です。イエスがすべての人と近しくあること、それを見つめるのはどんなにすばらしいことでしょう。だれかに話しかけるときにイエスは、深い愛に満ちた心で相手の目をみつめます。「イエスは彼を見つめ、いつくしんだ」(マルコ10・21)。道端の盲人に近づかれたこと(マルコ10・46～52参照)、罪びととともに食べたり飲んだりすること(マルコ2・16参照)、大食漢で大酒飲みだといわれても気になさらないこと(マタイ11・19参照)からは、イエスがわたしたちに近しいかたであることが理解できます。罪深い女がご自分の足に香油を塗るままになされたこと(ルカ7・36～50参照)や、夜遅くニコデモを受け入れられたこと(ヨハネ3・1～15参照)も同様です。十字架上でのイエスの自己奉獻は、その全生涯にわたってしめされているこうしたあり方の頂点にほかなりません。この模範に魅了されてわたしたちは、社会へと深く入り込み、すべての人と生活をともにし、人々の不安に耳を傾け、彼らの必要に応じて物質的にも霊的にも協力し、喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣き、他者と手を取り合って、新しい世界の建設に打ち込みたいと思っています。ただしそれは、義務としてでも、精根尽きるほどの負担としてでもなく、わたしたちを喜びで満たし本当に自分にしてくれる、一人の人間としての選びなのです。(269)

